


朝日新聞

(能登半島地震 あの時医師は) 小児科医、子どもたちとともに：2 相談、2月から増え始めた

有料記事

2024年4月23日 5時00分



ごちゃまるクリニックでは、駐車場に建てられたコンテナでの診療が続いている＝石川県輪島市 

は、現実のものとは思えなかった。

クリニックの建物は安全が確認できず、まずはかかりつけ患者の安否確認や、急ぎで薬が必要な人への処方からスタートした。市の依頼を受け、母子避難所での親子の相談にも応じた。

ただ、夫で総合診療医の友行さん（44）が高齢の患者を中心に忙しく対応する一方で、小児の患者は激減していた。多くの子どもが市外へ避難し、街には地震前の3分の1ほどしか残っていなかった。非常勤で診療する市立輪島病院では、受診がゼロの日もあった。

「私は何をしたらいいんだろう」。立ちすくむような思いだった。

フェイスブックに葛藤を書き込んだところ、医師仲間から声が寄せられた。中でも、東日本大震災で支援経験がある先輩医師の言葉にはっとした。「小児科医が重要になるのは、この後だよ」

実際に、2月ごろから地震の影響とみられる受診や相談が増え始めた。

石川県輪島市の小児科医、小浦詩さん（42）は、帰省先の大分で能登半島地震のニュースを聞いた。

輪島朝市の火災発生場所からほど近い自宅は、一部損壊したものの焼失は免れた。副院長を務める「ごちゃまるクリニック」も壁や天井の一部が落ちるなどしたが、建物は無事だった。

1月7日、子どもたち3人を実家の両親に預け、詩さんは輪島に戻ってきた。街の景色

また地震が来るのが怖くて自宅で寝付けなくなったという中学生は、外来で定期的に様子を見ることになった。「2次避難先で子どもが泣いている。新しい環境で頑張ろうとしているけれど……」。そう言って相談してくる母親もいた。

もともと、親や子どもたちの困りごとをすくい取るべくクリニックの外での活動を始めた。「これから地震の影響が年単位で続いていく。私のやるべきことは変わらず、より工夫してやっていけばいいんだ」。改めて詩さんはそう感じた。(松本千聖)

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、iryoyk@asahi.com へお寄せください。

朝日新聞のデジタル版に掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.